

ネイパル・アース キッズ～湿原・川～

■ 事業のねらい

水辺や森林における自然観察や調査活動等とおして、身近な環境問題に関する興味・関心を高めるとともに、環境保全に配慮した生活の大切さについて理解を深める。



- 実施日 平成 24 年 9 月 15 日 (土) ～17 日 (月) 2 泊 3 日
- 参加対象 小学 4 年生～中学 3 年生 40 名
- 参加実績 参加者：26 名
小 4 = 9 名、小 5 = 12 名、小 6 = 4 名、中 1 = 1 名
男子 = 10 名、女子 = 16 名
- 備考 協力：厚岸町水鳥観察館
厚岸町環境教育推進委員会エコランド 2012
活動場所：厚岸少年自然の家、別寒辺牛湿原、別寒辺牛川、厚岸町水鳥観察館

1 事業実施の背景



北海道環境教育基本方針では、北海道は現在、廃棄物や生活排水の問題等といった身近な問題から、地球温暖化、オゾン層の破壊、森林の減少等の地球規模に及ぶ問題など、環境問題が深刻さを増していると指摘している。

厚岸町では、環境教育推進のため、平成 8 年に厚岸町環境教育推進委員会が設置され、地域の特性を生かした環境教育を推進しており、平成 20 年には、小学生を対象に環境教育をテーマとした事業「エコランド」を開催しているが、その後、継続されずに現在に至っている。

そこで、本事業は、厚岸町環境教育推進委員会の協力を得て、道東の優れた自然環境に目を向けさせ、環境に対する関心を高め、問題解決能力を育成するとともに、知識を習得するだけでなく、日常生活の中での様々な環境問題に取り組むことができる実践力を身に付けることを目指し、実施するものである。

プログラムの展開にあたっては、アマモ場が広がる厚岸筑紫恋海岸とカキを養殖する厚岸湖、別寒辺牛川流域の湿原（ラムサール条約登録地）、約 1 万ヘクタールの国有林パイロットフォレスト等、厚岸の豊かな自然環境をフィールドに、海、湿原・川、森の 3 回シリーズで、水辺から環境について考えていくこととした。

第 1 回目の今回は海をテーマに展開する。

2 プログラムデザイン

	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22
9/15 (土)	受付 10:00～10:30				受付	開会式	バス移動	持参 弁当	湿原がはぐくむ命 ○別寒辺牛湿原での自然観察 ○湿原を守るためにできること 講師：長岡滋雄氏（厚岸少年自然の家）				バス移動	夕食自由	水の惑星 地球を知る	入浴自由	就寝
9/16 (日)	起床	清掃	朝食	バス移動	川から自然環境を考えよう ○別寒辺牛川でのカヌー体験 / ○厚岸町水鳥観察館での学習 協力：厚岸町水鳥観察館 講師：澁谷辰生氏（厚岸町水鳥観察館）				バス移動	休憩 必要に応じて入浴等	夕食自由	活動の ふりかえり	入浴自由	就寝			
9/17 (祝)	起床	清掃	朝食 点検	活動のまとめ と交流	閉会式	解散 11:30											

■ アクティビティについて



■ 意図

- 湿原の中へ実際に入って、湿原に生息する植物や動物を観察したり、カヌーで川を下りながら、周辺に生息する植物を観察する活動をおして、湿原や川の豊かさを感じ取り、たくさんの生物が生息するために必要なことを知る。
- 別寒辺牛川流域には、イトウなどの魚や、タンチョウなどの水鳥が数多く生息していることから、この恵まれた湿原や川の環境を守っていくために、自分たちにできることが何かを考える機会とする。

■ 留意事項

- カヌー乗船や湿原を歩くなど、水辺での活動の際には、参加者全員が安全に活動を行えるよう、一人ひとりの様子に目を配り、きめ細かな個に応じた支援を心がける。

3 活動の様子



■ 活動の様子

1日目は、開会式の後、別寒辺牛川中流に移動し、広がる高層湿原を高台からながめた。次に、高層湿原がどのように形成されるのかを、実際に湿原の中に入って学んだ。湿原を覆っているミズゴケをさわったり、ジャンプして地面が揺れるのを体験したり、地中50cmの土をサンプリングして300年ほど前の火山灰の層を見たりと、この場所でしかできないことを子どもたちは体験した。夜は、「驚異の旅」というアクティビティを行い、地球上にある水が、水蒸気や氷などに状態を変えてどのように移動しているのかを学んだ。

2日目は、午前中に別寒辺牛川をカヌーで下り、川の流れを実感しながら、川辺の植物を観察した。午後は厚岸町水鳥観察館の澁谷辰生氏から、別寒辺牛川に生息する動植物についてのお話をいただき、厚岸が貴重な生き物たちが棲むことのできる豊かな自然環境であることを学んだ。夜は、フィールドワークの内容をグループごとにまとめる作業を行った。今回の学習でわかったことや気がついたことなどを一人ずつメモに書き出し、それぞれの意見を交流して2日目を終えた。

最終日には出された意見等を模造紙にまとめ、題名や小見出しを付け、発表の役割分担を決めて練習をし、最後に各グループの発表を行い全日程を終えた。

■ 参加者の声

- 湿原の下には植物が腐らずに積もっていることがわかった。
- カヌーから普段は見られない川岸の風景を見ることができた。
- 湿原の30cm下に300年前の火山灰があったので、1年に1mmずつ植物が腐らないで積もっていくことがわかった。
- 人が入ることで湿原がどんどん壊れていくことため、人はあまり入らない方がいいことがわかった。

4 事業評価



■ 参加者の変容【IKR調査結果】

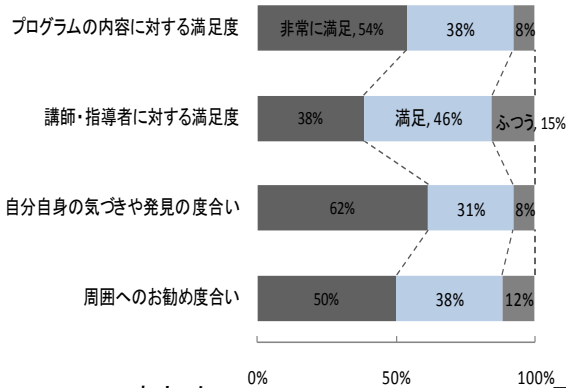
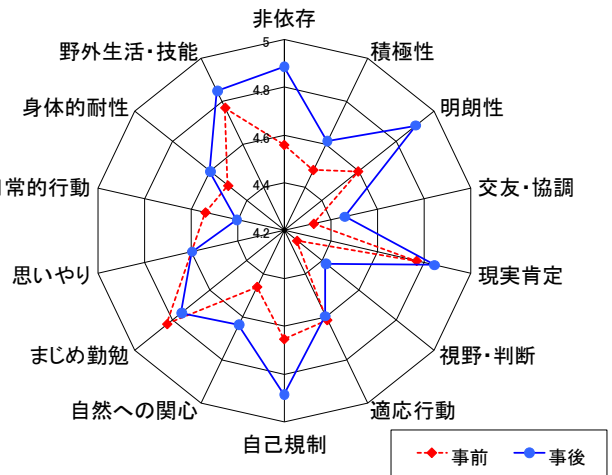
全体としては、3.0ポイントの向上。

最も変容を示したのは、「非依存」「明朗性」の0.3ポイントであった。続いて「自己規制」「自然への関心」は0.2ポイントの向上が見られた。

■ 結果の分析・考察

「非依存」「明朗性」の向上については、前回と同様に、「グループ活動」や「話し合い活動」を通じて、お互いの意見を出し合い、グループ内のまとめを行ったためと考えられる。

「自己規制」については、集団生活の中で、仲間のことを考えて行動できたこと、「自然への関心」は、湿原や川で花や草木の色付きから、季節の移り変わりを感じることでできたためと考える。



5 まとめ



■ 成果

- 厚岸町水鳥観察館の澁谷氏から、川と生物の関係や湿原について、専門的な質の高い情報を得ることができた。
- ミズゴケが水を保持する力や、湿原を構成する土地について体で感じたり、掘って観察するなど、実際に湿原の中に入らなければできない体験をしたことで、参加者の興味・関心を高めることができた。

■ 課題・今後の方向性

- 学習のまとめについては、これまでKJ法を用いてグループごとに模造紙にまとめさせたが、成果を持ち帰って、その後に生かせるような方法を取り入れるなど、まとめ方を工夫する必要がある。
- カヌー体験は、単に川下りを楽しむことになりがちであるが、事前に川の流れや周辺の動植物についての学習をしておき、当日実際に見て確認するなど、体験が学習と結びつくようなプログラムの工夫が必要である。